会報 真農

会報 第14号

発行所
栃木県立
真岡農業高等学校
同窓会
発行人
同上編集部
印刷所
こだま印刷

在校生の諸君に期待する

昭和十六年度卒
同窓会長
菊地 恒三郎

一九九〇年、二十世紀末のこれからの十年は、二十一世紀の扉を開く十年でもある。平成元年は世界的にまさに激動の年であったが、日本は政治的な変動はあっても経済的にも治安も安定した中での国民生活であった。これほど恵まれている国がどこにあるだろうかと思う。しかし、これからの十年はどのような道をたどることになるのか。世界の中の日本、そして世界の指導的立場にある日本のこの十年は、世界の方向を定めて行かなければならない時代でもある。特に、農業の方向と教育は重大な局面を迎えていると考えなければならない。

水田再編成対策にみられるように「米」の問題は日本農業の根幹を揺さぶるばかりか、国の食糧安全保障上の問題として重大な局面に立っている。世界の経済競争のみに気をとられ、将来の国家、民族の行方を誤るようなことがあってはならない。生活の基本である農業をしっかりと見定めていかなければならないのである。

今、真岡市を中心としたこの地方も土地基盤整備事業を進め、営農集団の育成、営農公社の設立等水田経営の合理化と世界の農業との競争、国家の食糧安全保障の確立を図るべく政策を展開している。

本校も、新しい農業構造とそして人間教育の実現のために、来年度から学科の再編成が行われ農業経営科、農業機械、食品化学科、生活科学科となり、将来の優秀な職業人教育を目指すことになったことは誠に喜ばしい限りである。

新設される農業機械科は、今後の農業になくてはならない分野の仕事を担当することになるであろうし、農業経営科は栽培、飼育の高度な技術の取得を、そして食品化学科は二次産業の担い手として化学工業の分野での活躍が期待される。生活科学科は特に情報化時代を先取りし、これからの社会生活をより快適なものにしていく知識と、人間性豊かな情操の取得を目指して、新しい「真農魂」を形成していく中心的な学習活動が期待される。

二十一世紀が明るく希望に充ちたものになるか、それとも暗く悲しむべき世界となるか、二十一世紀を造っていくのも、その幕を開けるのも君達自身である。

世界の人類のため、そして、生きとし生けるものの幸せのために君達に限りない期待を寄せるものである。

平成二年度実施
新しい学科に向けて

学校長 木山 八郎

平成二年の新年を迎えることができましたこと、皆様とともにお慶び申し上げます。

本校に赴任して早や一年が経とうとしていますが、同窓生の方々にはご理解と力強いご協力、ご支援を賜り、感謝の念を覚えるとともに、唯々責任の重さを痛感いたしております。

平成二年度はいよいよ本校も創立以来八十三年の尊い歴史を重ねることになりますが、この間、一万二千有余の同窓生をはじめ、PTA、地域の方々のご支援ご協力のもとに、県下に誇る美しい環境と充実された施設々備の中で堅実な歩みを続けている次第であります。

さて、最近における農業情勢は、急激な経済社会の変動に直面し、主要農産物の価格の低迷、貿易自由化、他産業との所得格差、補助対策事業の停滞等でますます農業離れが進行し、極めて厳しい状況にあります。一方では農業技術が高度化し、新しい生産方式の導入が必要となるなど経営が一層専門化し、加えて産業構造、就業構造が大きく変革し、農業から地産業への労働力の流出が進み、そのため適格な農業後継者の確保が困難な状況になっています。このような情勢の中で、県下の農業高校においては、新時代を担いうる農業人、産業人の育成にむけ、活力ある希望に満ちた学校を創造し推進することが、緊急の課題となっております。本校としては、これら社会の趨勢や、時代の流れに対応するため、また、地域の要請に応えうる新たな質の高い農業教育を推進するよう、本校の歴史と伝統を踏えながら、昭和六十年度より学科再編について検討を加えて参りました。

現在は、農業科、園芸科、畜産科、食品化学科、生活科の五学科を設置しておりますが、平成二年度より、従来の農園畜科を改編し、農業経営科（二クラス）農業機械科（一クラス）を新設、それに既存の食品化学科、生活科を生活科学科に改名し、四学科六学級を設置することで将来七二〇名を擁する農業教育の専門校として発足することになりました。

農業機械科は、栽培・飼育等の農業生産および経営に関する知識・技術を修得させ、地域農業の中核となる農業自営者を育てると共に、さらに農産物の流通や、農業機械の知識・技術を修得させ、関連する業務に従事する技術者を養成します。また。**農業機械科**は、時代の変化に対応した機械化農業を推進できる農業経営者を養成し、また、大型機械の運転操作、整備・点検技術サービス等の業務に従事する技術者を養成します。

今後学科再編に伴う種々と課題が残されることと思いますが、二十一世紀の農業を担う人材を育てる責務を再認識して、職員・生徒一体となって努力して参りますので、同窓生の皆様方には、より一層のご支援、ご協力の程をお願い申し上げご挨拶と致します。

カリフォルニア
農業見聞録

昭和五十七年度卒
同窓会青年部々長
大滝 和弘

昨年十一月、栃木県農業青年海外派遣団の一員として、カリフォルニア農業を視察する機会に恵まれた。

肉牛十万頭を肥育するハリス牧場オレンジ農家のウオタ農場、その他精米工場等を十一日間にわたり視察した。その中でも、特に印象に残った事についてふれてみたいと思う。

バスで移動中、突然目に飛び込んできたのが、ハリス肥育牧場一帯に広がる黒い群れであった。遠くからではアリの群れのように見えたものが、全て牛であったとは思いもよらなかった。規模や面積の広さは、知識として知ってはいたが、実際に自分の目で見ると、その大きさにただ驚くばかりである。ここでは、二百四十ヘクタールに十万頭の肉牛を肥育しており、年間二十五万頭を出荷する。とてつもない数だ。その他、ホテルなども経営しており、日本の農業からは想像もつかない。

そして、一番興味のあった国府田農場。現在二千八百ヘクタールの耕地を所有し、四十五名の労働者、もち米千六百ヘクタールをメインに六百ヘクタールの国宝米、その他六百ヘクタールに綿花などを作付けしている。

今、米の自由化が問題となっているが、これは非常に恐ろしいことであると、総支配人である鯨岡氏は説明してくれた。日本は一粒たりとも米を輸入すべきではない、という言葉がとても印象的であった。国府田農場では、いろいろと考えさせられる事が多かった。

国際化時代を迎える今日、農業の面においても単に国内だけの視野にとどまらず、広く知識を外国に向けることは重要である。カリフォルニア農業を見聞できた事は、外国の農業を知るとともに、国際的な視野から、日本のそして自己の農業を見つめ直すよい機会となった。

- 適地適作農業
- かんがい農業
- 大型機械化農業
- 企業農業

以上カリフォルニア農業の特色である。

日本の農業とは、規模、気象条件、社会的条件等、いろいろな面で異っており、単純に比較することはできない。しかしこの研修で自ら体験したことを、これからの農業の参考にしたい。とにかく大きかったアメリカ。その大きさに圧倒されながらも、じかに見、体験することの大切さを痛感した。

今、農業を取りまく問題は様々であるが、更に積極的に農業に取り組んでいくつもりである。研修で出会ったバイタリティーあふれる人々の姿を思い出しながら……。

衆議員在職二十五年表彰

平和の配当

昭和十年度卒
衆議院議員
広瀬秀吉

私が栃木県立真岡農学校を卒業したのは、昭和十年の三月でありました。当時の中村尋常高等小学校高等科を卒業しての入学というわけです。

これに先立つ昭和三年（一九二九年）には近代史に特筆されるニューヨーク株式市場の株価の大暴落に端を発した世界的経済恐慌のまっただ中にありました。その上日本では冷害を中心に東北関東地区の農産物の不作が続き、農村は不況のドン底に喘ぎ、東北地方の若い娘さん達が一家の生計を助ける為に、大都市の歓楽街に身売りをしなければならないという悲劇が連日の新聞に報導され、子供心にも悲しい思いをさせられたことを今でも憶えています。

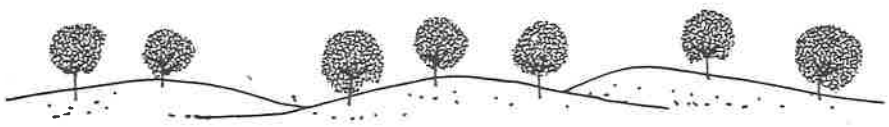
当時は今日のようにラジオが家庭内に備えられ始めた状態でしたから、新聞だけが情報を得る唯一の方法でした。豊富なマスコミに取り巻かれて毎日の生活を送って居られる現在の皆さんには、想像もつかない貧しい暗い時代でした。「暗い」といえば電灯が農家につくようになったのもその頃で、それまでの一戸に一個か二個の石油ランプからたった一つの電灯がともされたときの明るさに驚喜した思い出も忘れ得ぬ感動でありました。

僅か五・六十年の間に、今日見られる生活の豊かさに到達し、今や世界一の経済大国にのし上り、国民生活もやれグルメの時代とか飽食の時代など言われるまでに発展したナゾは一体何だろうか。

昭和の初期から第二次大戦の終結するまでの間、当時の日本は殆んど休むことのない戦争を続けて居りました。昭和二年山東出兵、三年の清南事件、四年満州出兵、六年満州事変、七年上海出兵、十二年盧溝橋事変、第二次上海事変、十四年ノモンハン事件、そして遂に昭和十六年十二月大平洋戦争に突入、広島長崎に原爆投下を受けようやく二十年続いた戦争時代に終りを告げ、日本国平和憲法の下に今日まで四十五年の平和な時代を迎えることができたのであります。

私が農学校在学中にある先生は、一九三四・五・六年を語呂合わせ流に、イクサシゴロなどと教室で戦争を煽るかの如き話しをされました。まだ思慮の足りなかった私は、素直に日本男子と生れた以上一死報国を心に誓ったものでした。経済不況打開のため対外侵略戦争によって国を富強に導く、これが軍部主導の政治でした。

私がこのことの誤りを心底から悟ったのは学徒出陣第一号として大平洋戦争に参加し、熊谷飛行学校教官として特攻隊員教育に当り連日無限の可能性を秘めた教え子たちを往きて還らざる特攻出撃に送り出したときでした。戦争ほど非人間的惨酷なものはない。「人間の生命は地球よりも重い」という真理を打砕く戦争への憎悪を抑えることが出来ませんでした。更に戦争と軍備増強は国民生活を貧困に陥し入れるだけです。さすがに米ソ両国も最近それに気付いて、戦争と対決から平和と共存への途を歩み始めたのであります。四十五年の平和こそ日本を経済大国に飛躍させたナゾ解きではないでしょうか。



黄綬褒章受賞

母校の思い出

昭和二十一年度卒
中村支部
斉藤喜久雄

私が真農に入学したのは大平洋戦争の真っ只中の昭和十九年の春でした。当時真農は農業教育の名門校として知られ、在校生は一学年百名、三学年で三百名の男子のみの小さな学校だった。ほとんどが農家の長男で学習に対する意欲は旺盛でみんな真剣に勉強した。

軍国主義のはなやかな時代で先生は勿論、上級生と下級生の区別は厳格で、先生や上級生に逢えば直立不動の姿勢で挙手の敬礼をしなければなりません。少しでも姿勢や態度が悪かったりすればなぐられることもあったが真農魂をたたきこむという大義名分もあって、なぐられてもそんなに苦にならない時代でした。

今にして思えばその頃から大平洋戦争もだんだん敗色が濃くなってきました。農業の後継者もつぎつぎに出征し、日増しに食糧が不足し食糧の増産が急務になってきました。一年生のとき、猿山の開懇がありました。一年生から三年生まで混成の班で区画をきめ唐鍬をつかっての開懇でした手に豆ができても我慢をしてやっとの思いで開懇も終り豊作を祈ってサツマの苗を植付けましたが、期待した収穫は肥料もなく、ヤセ地であったため反当り二百キロほどの収量にはがっかりした。

又出征者の家に勤労奉仕に行き、炎天下の除草や、稲刈に汗を流した。サツマイモ等のオヤツが美味かったのは楽しい思い出になっている。

学科の中に教練という科目があって、配属将校の教官の指導をうけました。当時はだれもが立派な軍人になりたいというのが夢であったので教練はみんな真剣にやった。

二年目に本土決戦に備えて日本の軍隊が学校に駐留し校舎の一部を兵舎にし、厩舎を校庭に立ていっしょに生活することになった。兵隊さんは毎日赤飯をたべているのかと近づいてみたら、コーリャン飯をたべているのには驚きました。

B29が編隊を組み空襲されるようになり、真岡や宇都宮も戦火をうけました。広島と長崎に原爆が投下され八月十五日に終戦となりました。日本兵が故郷に帰還して学園にやっと平穏がもどってきたのも束の間で、今度は意外にもアメリカ兵が進駐し、校舎の一部が占領されて又もや同居の生活をすることになった。その頃は燃料が十分にない時代でした。日本兵が燃料用の薪にしようとして割れなかった大きな桜の木を見つけて斧をもち、一人づつ一点をめがけて、かわるがわる全力で斧を打ち込み簡単に割ってしまいました。その合理的なやり方には全く感心をした。

三年間の在学中、一年半は軍国主義の教育をうけ、あとの一年半は民主主義の教育をうける混乱と転換の時に在学したが、今になってみるとその一つ一つの体験が自己の修練になっていたと思うこの頃である。

収穫のよろこび

昭和三十六年度卒
PTA会長
大貫勝夫

真農高同窓会員の皆様には日頃大変など理解と御後援していただき厚く御礼申し上げます。同窓会員の皆様により本校は県下の農業高等学校としてはトップグラスの学校であり、会員全体の誇りである事と思っております。

現在の農業は世界的な農作物の自由化、特に国内では三割以上の水田休耕など色々な面で農業高校の縮少も余儀なくされつつあり、本校でも農業科を縮少し園芸科、畜産科が導入されております。

本校では、農芸畜科が再編され、農業経営科、農業機械科など様々な再編がなされるようになりますので、本校の生徒自身の将来に大変な希望と期待がもたれる事と思っております。

昨年度の本校のおもな行事であります農業祭と収穫祭を見学いたしました。

農業祭においては誠に立派な研究がなされており、私などには生徒や先生にいちいち説明されなくては理解ができないような今日の農業であります。専門的な研究がなされており、生徒達も自信と希望にみちておりました。それに校庭では農作物、苗木・花木など色々の農産物が数多く出品されており、新鮮な物ですので大変な人気であり、一般の方に販売されており、生徒達も自分の出品した物が販売されるという事は大変な喜びだと思います。

農業祭も盛大の中に終り、後日収穫祭は全校生徒が校庭で五、六人のグループになり生徒自身が作った米や野菜などで色々な料理を作り全校生徒、先生、PTA会員がグループを作り、生徒達の将来の事や、今の自分の気持など色々な話合う場所でもあり誠に素晴らしい事と思います。

最後になりましたが、本校PTAの本年度の活動方針を具体的に二～三点お知らせしたいと思います。

第一に家庭教育の充実
(一)家庭学習の習慣化
(二)しつけ教室
(三)親子の対話
(四)親の意識の高揚
(五)交通事故の防止

第二に支部活動の活性化
(一)保護者間の交流
(二)地域内生徒の健全育成

以上のような方針で活動しております。

今後共会員皆様の温い御支援と御協力をよろしくお願い申し上げます。

優良農家経営

我が家の農業経営

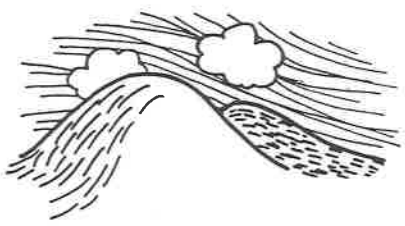
昭和三十九年度卒
中村支部
野沢進

私は、昭和三十九年本校を卒業後農業に就業しました。家族構成は、両親、妻、子供三人、従事者は、両親、私と妻、特に子供達三人の労力にはほんとうに助けられています。

当時から、我が家の経営は、稲作プラス干瓢を栽培しています。卒業当時と今では干瓢の作付面積は約二倍になっています。でも、この作物だけは、他の作物とちがって典型的な自然相手の作物であり、機械化と言う訳にはいきません。でも、数年前から当地区でも、野菜の暖房機を利用して、雨の日でもビニールハウスを使って、小量ではありますが乾燥をすることができるようになり、労力的にもづいぶん楽になりました。

だが、ここ二・三年前から韓国、中国産の安い干瓢がどんどん輸入され、国内産の干瓢がほとんど荷動きがなく、今までになく最も安い年であります。生鮮食物とちがって保存食物でありますので、今後も期待はできません。干瓢をやめて、他の作物とも思うのですが、何十年という長い間作付してきたものだけに転作もむずかしく考えております。

又、長田地区には、平成十二年開通予定の北関東横断道路二九四バイパスが耕地を横断し、我が農業はこうしたきびしい現状の中で、農業をしてきてほんとうに良かったと思えるように、地域の皆さんと手を取りあって頑張っていきたいと思います。



優良農家経営

我が家の農業経営の歩み

昭和四十一年度卒
大内支部
大田和　正一

私は昭和四十一年に本校を卒業後農業に従事しました。

当時を振返って見ますと、殆どの農家は、米麦中心の農業であったと思います。

私の家でも、水稲・麦・陸稲・落花生・カンピョウ・ラッキョウ等を栽培していましたが、畑作についてはもっと高収入の作物は無いものかと種々と農協側とも相談をし、当時陸稲に変る作物として、契約栽培の加工トマトを推進していたので、昭和四十二年に二十アールを栽培始めてから、昭和五十年には百二十アールと規模拡大をし、収穫期には、アルバイト生として真農の生徒さんにも手伝って頂いた事もありました。

その後天候不順により、すじ腐れ病が多発し、四年間も減収が続き十八年も続いたトマト栽培も断念せざるを得ませんでした。

水田においても、後継者育成資金を借り受けて施設園芸でビニールハウスを建て、トマト・キュウリを栽培し成果を上げることができました。

昭和四十八年のオイルショック時では、暖房用の燃料の確保が大変であった。それから基盤整備の為、土地改良事業があり、ハウスを取りこわさなければなりませんでした。

畑でも連作障害を防ぐため開田をし、麦・トマト・落花生・陸稲等を栽培した。

現在の経営状況は、家族六名で（妻・子供三名・母）です。労働力は二名です。

経営面積は畑百二十アールで大根・加工バレイショ等です。

水田は、自作地と小作地を合わせて六百アールで、水稲麦・ニラ等です。米の過剰により生産調整や米の消費が少なくなったので米離れが多くなった為コシヒカリを中心としたおいしい米作りをし、消費拡大をしたいと思う。

大型機械の導入により、労力の省力化を行い、生産コストダウンを図り、経営安定を考え、ニラは水稲の転作に伴い、野菜の作付増加過剰基調の中、産地間の競争は益々厳しく予想される。

このような情勢の中、土作りを基礎として、良いニラ作りをし、安定生産週年出荷体制中、夏ニラは雨よけ栽培、冬ニラはビニールハウス栽培をし、年間要冷、鮮度保持をし、消費者のニーズに合った物を出荷し、市場等にも信頼される物をめざし栽培して、品質向上を計り規模拡大に取り組んで行きたいと思う。

今後の農業を取り巻く情勢は厳しさを増し、日本国内を論じるだけでなく、国際化の大きな波に揺られている中、情勢を良く考え、見つめながら経営の安定に努力していきたいと思います。

我が家の農業

昭和四十六年度卒
中村支部
稲見　孝一

私は、昭和四十二年度真農を卒業し、農業に就農しました。

我が家は、真岡市の南西部に位置し鬼怒川にそった沖積土壌の水田地帯であります。

その頃、真岡市中地区は、土地改良事業により基盤整備が完成した年でもありました。

それまでの経営内容は、水稲＋麦作が中心的なもので、苺栽培は少なかったようです。規模拡大し、機械化した農業を目ざすか、今の経営規模により反収面を考えた経営をするかが問題であったと思います。点在していた水田が一カ所にまとまり、苺栽培をするには適した土地になりました。当地域は、大消費地の京浜市場に近く、気候面から見ても冬季の寒さは厳しいが晴れの日が多いと云った事、また河川に近いこともあって地下水に恵まれているなど、農業をするに適地ではないかと思いました。

栃木県内の苺栽培は、ダナー種が全てで、トンネル栽培からパイプハウス栽培へと変った頃でもありました。昭和五十五年頃より、品種もダナーから麗紅へ、さらに女峰へと変り、今では作型も平地育苗からポット育苗、さらに夜冷育苗へと近年さまざまな栽培型が研究され、年々早出しがなされてきました。

我が家でも、昭和五十八年より女峰を導入し、出荷の前進化とともに長期出荷を目ざして来ました。年内出荷を一つの目標におき、昨年より夜冷の二作型（二十二a）十ポット育苗（十四a）をしております。

苺の栽培型が多様化していく中で、労力・単価の面を考えると長期間平均した出荷を計画していかなければならないと思う。

農業も国際的な場所で、大きな問題になって来ております。米価を初めとして食糧全般にわたり自由化の声が大きくなっている。その中で農業がなくなっても良いと云う消費者はいないでしょう。新鮮で安全性のある安い物が要求されているのでしょう。

私も今、農業を通し地域及び農協青年部の一員として先輩や仲間達とともに、地域の農業を考え、我が家の経営に生かしていきたいと思います。

私の農業経営

昭和四十六年度卒
山前支部
高崎　弘幸

私は、農業高校を卒業してすぐには農業に従事しませんでした。十二年間ぐらいは、会社勤めの合い間に手伝う程度で、あまり農作業はしませんでした。が、重機運搬トレーラーの運転手を始めた頃から、建設機械の操作をしているうちに、農業機械にも興味がわき、序々に農作業を手伝う機械が多くなってきました。

現在は、卒業生の就業率も非常に低く、いつかは若い人達にも就農していただきたいと思います。確かに農業はたいへん難しい時代に入りましたが、収穫期の喜びは、他の職業にはないものがあります。

我が家では、水稲プラスこんにゃく栽培をしています。稲作に関しては、現在、育苗代かき、田植えと収穫期の刈取り、乾燥調整、耕起作業（ロータリー耕、サブソイラー作業など）部分請負をメインに、一、八ヘクタールの耕地の大部分でコシヒカリを作付しています。高温障害の悪条件により等級が非常に悪く、一等が六〇パーセント、二等が四〇パーセント程度で、反当り九俵程度の収量でした。作業受託も年々増加の傾向にあり、地域の人々と年齢に関係なく、対話ができるようになり、自分なりに楽しい日々を送っており、農業を継いでよかったと思う今日この頃であります。

こんにゃくに関しては、生子、売り玉を含めまして、一、八ヘクタールを作付しています。思いのほかこんにゃく栽培は、重労働であり、年々高齢者の作付が減っているのが現在の状況です。露地栽培ということで、気象条件に左右されやすく、安定多収がなかなか望めないのが本音です。農業による依存度が高く、少しでも低農薬でやっていきたいと思っています。

私の場合は、父母が、現在の基盤を固めてくれたことを感謝しております。これからは、品質の向上とコスト低減を図り、常に改善意識をもった経営を行っていきたいと思います。そのためには、効率的な農業機械の利用と規模拡大を図り、地域相互の協力体制の充実化、及び情報交換を行い、原点を見つめ直し、技術の向上を図っていきたいと思います。

回想

昭和四十八年度卒
大内支部
大塚　実

私が真農を卒業し、高等園芸研究所に入り、一年と三カ月寮生活を過しました。

それまでは、家が農家だから、農家の長男として後を継げばいいのだと思っていました。それが多くの仲間や、色々な花にめぐり合い、だんだん花の専業を考えるようになり、少しづつ規模を拡大してきて、会では我が家の経営もガラス温室一〇〇〇坪、ビニールハウス二〇〇坪、パイプ八〇坪、それに母株室八〇坪の施設を利用し、スプレー菊を年間十五作、それに、その他の花きを二〇〇坪栽培する切り花菊農家になりました。

今、考えて昭和四十八年のオイルショックの時が、就農でしたから、十五年過ぎた現在こんなに施設が充実し、規模拡大できるなんて思ってもみなかった。ところが現在も規模拡大と、消費ニーズの対応に創意工夫の今日である。今後の経営の中にスプレー菊の良品質の確立、近年のヨーロッパからの輸入切花の量、品種の多さは、市場調査、新聞等で痛い程知らされている。それで、過年ヨーロッパ研修に参加する機会がありましたので、国際的切花、アレンジメント等を学び、切花の素晴らしさ、大きさを知り、壁にぶつかりながら、アレンジフラワーへ夢を軌道にのせたいと思っています。

それには、多くの素晴らしい先輩、仲間の力を借りながら、納得のいくまで自分の花栽培への道を生きられたら農家の後取りではなく、本当の意味での後継者になれるのではと思っています。

これから、夢を実現するのに妻や、子供達にも多くの負担がかかると思うけど、私が精いっぱいの努力をしていることが、子供達への道しるべになれば農業も素晴らしい職業だと思います。

青年部活動報告

同窓会青年部　研修旅行に参加して

同窓会青年部事務局
広瀬　隆一

真岡農高を後に、研修の目的である八日市場市へと車を走らせました。

途中成田山新勝寺に寄り、研修旅行の無事終了と交通安全、家内安全を祈願しました。

八日市場市農協を尋ね、職員の方にハウス団地を案内していただき、トマト栽培を見学しました。説明を聞いていると、栽培技術はもとより、価格の動向、資材の高騰など問題が山積とのことでした。他人ごとではない様な感じも実には経営基盤を更に安定させるためにも、これらの問題を検討し経営改善に取り組む必要性があると思われます。

視察を終え、犬吠埼へと足を早めました。途中犬吠埼灯台での休息は少し肌寒く感じられたものの自然が造った屏風岩、大小の奇岩等、景観美はすばらしいものでした。

夜の懇親会では、新鮮な海の幸に舌鼓を打ちながら話に花が咲きました。今までにないような充実した親睦の時間が過ぎました。連帯感を深めることもでき、たいへん有意義な研修旅行でもた。

今後の同窓会青年部活動においても、青年部活性化のためにも、より一層の団結と活動の内容を充実させたいものです。これからも多様化していく社会情勢ですが青年部の果す役割は、計り知れないものがあると思います。

今回の研修で得たものを今後の参考にしていきたいと思います。

真岡農高を後に、研修の目的である八日市場市へと車を走らせました。

途中成田山新勝寺に寄り、研修旅行の無事終了と交通安全、家内安全を祈願しました。

八日市場市農協を尋ね、職員の方にハウス団地を案内していただき、トマト栽培を見学しました。説明を聞いていると、栽培技術はもとより、価格の動向、資材の高騰など問題が山積とのことでした。他人ごとではない様な感じも

し、食と緑の担い手である私達の使命は、ますます大きくなりつつあることを感じ得ました。単に農業収入を上げれば良いというだけではない時代になり、組織的に取り組む必要性があると感じました。思えば我が国の農業経営の技術向上による米麦等の過剰生産と、反対に食料不足の続く多くの国もあり、生産性の向上を願う農業経営には矛盾したところもあるが、やはり現

文部省海外教育事情視察派遣

ワインの里を訪ねて

教頭　菅谷　善六

ヨーロッパと云えばECを代表する国の一つであるフランス、その中でも就中、首都のパリ。一般にフランスという言葉からイメージするものは、ファッションの本場、エッフェル塔、ルーブル美術館、〝花の都パリ〟、シックなパリジェンヌ、ワインと美食の国などなどです。

「あらゆるもの、その醜いものまでも魅力に変えてしまう古い都……パリ」「悪の華」の詩人　シャルル・ボードレールの言葉に象徴される如く幾多の詩人、芸術家がパリに酔い、パリに恋し、パリを讃美する言葉、探し続けてきたことだろう。世界中からパリに集まる芸術家たち、マロニエの葉一枚でもパリで散れば、そこに詩が生れる。

そんなパリを後にワインの産地で名高いブルゴーニュの首都、ディジョンへ。リヨン駅から世界一速いTGM（超特急）に乗りこむ。時速二七〇キロで、ゆるやかな丘陵地に放牧されている牛の群や、延々と続くブドウ畑地帯を走る。日本でも見かける長閑かな風景である。一〇〇分がすぎるとそこはディジョンである。

ディジョンはパリとはすこし趣をことにした街並である。ディジョンと云えばカタツムリ、つまりエスカルゴとブルゴーニュワインの本場で食通の町である。地理的にブルゴーニュはフランスの中央山脈の東端に当るモルヴァン塊丘陵地帯を中心とした地域で、東にソンヌ川が地中海へ向けて、西にロワール川が大西洋へ、そして北にセーヌ川に合流するヨンヌ川が流れている。

土壌は石灰質に富んでおり気候は南側は南欧に近く、町が大きいのみでなく、緑豊かな大地や森がある田園地方です。歴史的、文化的には古代ローマの時代から中世の修道会活動が盛んだったロマネスク期や北海ぞいのベルギー、オランダまで、その傘下に治め絶大な勢力を誇ったブルゴーニュ公国時代、それらの時代の栄華のあとを偲ぶ宮殿をはじめ、中世の城趾、城壁、城砦、田園の中のマナーハウス、イタリヤ風の家などが残されており、五～六世紀前とあまり変らない街並をみせている。ここディジョンからボーヌを経てサントネまではコート・ドール（黄金の斜面）といわれ、ここで生産されるものはコマネ・コンテなどと呼ばれている最高級ワインの古里を訪ねた。

ところでブルゴーニュ地方は、食通と美食の国であるフランスでも食べる楽しみを人生の無上のよろこびとしている点で際立っている。そしてこの地方は、キリスト教国のベスト・ワインを二千年に亘って造ってきたワイン王国である。ナポレオンが愛した、シャベル・タン、日本でもよく知られているロワネ・コンテなどの赤ワインの銘酒、そしてボージョレ、ポピュラーな高級ワインのシャブリ、プイイ、フュッセ、モンランエ、ムールソなどはすべて最上級ワイン造りに適した土壌と天候に恵まれたブルゴーニュで造られている。

ブルゴーニュ地方農政局長の説明によると、ブルゴーニュはコート・ドール県、ソーヌエロワール県、ニィブル県、イオンヌ県からなり、面積三一六〇〇㎢、ベルギーよりすこし大きく、人口一六一四〇〇人で人口密度はヨーロッパで一番低い。土地利用状況は、牧草地三〇％、耕地二六％、ブドウ畑〇、七五％、他は森林・宅地である。ワインはブルゴーニュ地方の総収入の二五％を占め、ブドウ栽培されている地方の土壌・気候によりさまざまな品質のワインが生産されるが、八〇％が赤ワイン、二〇％が白ワインで、輸出されるワインは赤・白ワインが五〇％ずつである。

次で斜面一帯に広がるブドウ畑の中にある広大なワイン醸造場（協同組合）を見学。

醸造工場に入ると酔うようなワインの香、早速副醸造長の説明と工場見学。醸造工場の傘下の農家数は一六八戸、栽培面積は一九七三年、一二五ha、一九七八年二三四ha、一九八三年二八七ha、一九八七年三六二ha、醸造場は二〇年前に創立され設立資金は農家の資金と国の援助による。

ワインの品質の向上を目指し研究開発に努力した結果、この工場はフランス（ブルゴーニュ）でも一級のワインを醸造しており、その内訳は金属製発酵タンク四六〇万ℓ、木製発酵タル二万本（タル二二八ℓ）である。またブドウジュースの品質により六種類に分け、上質のワインは木製タルに入れ発酵させる。また一回目の搾り粕のブドウの皮や穂柄、支柄等は再び搾り、きつい低紙ワイン（MAR）を醸造している。金属製タンクのワインは一年間位の発酵であるが木製タルのワインは三年から五年間発酵させ、よくねむらせてより上質のワインを醸造する。ワインは生きものであり、極めて温度に敏感に反応するので発酵タンク場はすべて地下室となっている。

ワイン用ブドウ栽培は石灰分に富んだ土壌と日照量、適度の降水量が決め手である。

ブドウの収穫時期を決定する要因は糖度、酸度、熟度であり、収穫検定員により収穫期が決められる。ブドウを栽培する地方によって、さまざまなワインができる。

フランスでは〇〇地方の△△地区の××さんのブドウ畑のワインと良く云われる。通例として何年もののワインとよく云われるが、それは長く保存されていただけで、良いワインの代名詞ではなく、古いものはめずらしいと云うだけであると云う。本当に良質のワインは十年に一回か二回（一年か二年）位しか生産されない。

ワインの試飲会となった。

過去十年間に醸造された最上級の赤ワイン（一九七七）をはじめ数種類を試飲した。「うまい、うまい」と飲んでみたが本当はよくわからなかった。説明によると客にワインを振舞うときは、一本一本のワインを主人が試飲し、更に客が一口試飲し、〝このワインで良し〟と納得してから振舞うことが礼儀作法と云う。

私が訪問した国々の高級レストランでは必ずこの方法が行かれていた。

ワインの良否の鑑定は、ワイングラスに三分の一ほど注ぎ、色、ワイングラスを振りながらワインの中に十分空気を入れ香をかぐ。次にワインを一口ふくみ味を確め、更にワイングラスの壁面に流れるワインの様子（ワインの涙）を見る。

ところで唐詩の涼州詞の一節に「葡萄の美酒夜行の杯、飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す」というものがあるが、「美酒」はどのワインに該当するものかと云う思いが脳裡をかすめた。

ワインの里を訪ねて、ワインが豊かな土壌とすばらしい太陽に恵まれているという現場とワインの現物、そしてワインの心を知悉している醸造者の濃かかな愛で育まれているという現実を目の当りにして、次のような感懐を深くした、「――ワインは生きものである――」と。

学校祭を盛大に開催

生徒会長　三年　松田博史

去る平成元年十一月八日から十三日までの六日間、学校祭を盛大に開催しました。

本校では、一般の皆様に公開する学校祭を一年おきに行っております。本年度は公開の年にあたり、一年前から計画し、私たちの学習成果の発表や皆さんに喜んでいただくためにいろいろ準備をしてきました。今年は「平成」という新しい時代の出発でもあり、生徒会一同張りきって取り組みました。学校祭のあらましを報告いたします。

初日は、開会式のあと、今年度から新しく加わったマラソン大会を行い、内容を一層濃くしました。校長先生の号砲一発でスタートし、男子は十三キロメートル、女子八キロメートルのコースをゴールを目指し走ります。「精一杯努力し、若さを発揮する」というこのマラソン大会は、「勝ち」「負け」の言葉にこだわることなく、自分自身の限界に挑戦し完走を目指すことに大会の良さがあります。参加者全員が完走し、さわやかな汗を流しました。

二日目・三日目は、来校してくださるかたのために「見やすく、分かりやすく、楽しく」といった心がけで準備しました。一年前から各学級ともアイディアを出し合い、一般公開日にのぞみました。朝早くから夜遅くまで真剣に、そしてお客様のために隅々まで気づかいして、気持よく案内したいと思ったからです。

四日目は、生徒だけの学校祭が開かれました。吹奏楽部や琴部の演奏発表があり、続いてカラオケやロックバンドが出場し、日頃見られない愉快な場面がありました。さらに、地元芸能として、真岡市中郷の皆さんにより獅子舞を披露していただき、私たちを楽しませてくださいました。

五日目は、一般公開日です。お客様を迎えての学校祭、今までの努力が実るのです。朝早くから大勢のお客様が並んでおり、開門と同時に各展示を真剣なまなざしで見たり、食堂などもにぎやかな声がとびかったりして盛り上がりました。今年は各クラス展示がとても華やかになり、カラオケハウスや古木屋などが設けられました。また、本校自慢の青果物などの即売、ハッピー姿での〝もちつき大会〟〝やきいも会〟も行われ、楽しんでいただきながら、一般公開日の幕を閉じることができました。

最終日の六日目は、収穫祭ということで、私たちが農場実習で収穫した物を使い、全員でカレーライスを作り、農作物に感謝をしながら楽しいひとときを過ごしました。

このように六日間にわたる学校祭の幕が無事閉じられましたことは、校長先生をはじめ諸先生、同窓会の方々、地域の皆さんの御指導、御協力あってこそと生徒一同深く感謝しております。また、次回も今年以上の学校祭になるよう成功をお祈り申しあげます。

真農卒南米在住者を激励

南米訪問団に記念品等を託す

去る十一月、在伯栃木県人会三十周年並びにアマゾン日本人移住六十周年記念式典がブラジルにおいて盛大に挙行されました。

南米には、本校卒業生九名の諸氏が新天地ブラジル、アルゼンチンへ移住し活躍されています。それぞれ母校卒業後、故郷から遠く南米へ雄飛され、気候、風土、言語、習慣の異なる新天地において幾多の困難を乗り越え、多大な功績を重ねつつ現在は輝かしい地位を築かれています。

記念式典には、栃木県知事栃木県議会議長ほか多数が出席しました。本校同窓会では慰問のしるしとして、同窓会長、学校長の挨拶文、慰問金、創立八十周年記念誌、同窓会報、家族からの手紙、写真などを訪問団員に託し卒業生へ贈呈いたしました。

その後、本会宛への手紙に「母校発展の様子を大変力強く思う。また当時がなつかしい。温かい心づくしに感謝し、今後も精一杯頑張りたい。皆さんによろしく」とのことでした。

活動報告

生徒会活動について

生徒会顧問　橋本真司

生徒会活動は会長の松田博史君をはじめ十四名の役員と顧問が力を合せて、多くの行事を運営してまいりました。

今年度も今までと同じように、「生徒たちによる生徒会運営」ということを基本にして活動を指導してまいりました。

平成元年度の行事を振り返ってみますと、一学期は部活動紹介、常任委員会、益子養護学校との交流会、生徒総会球技大会、野球の応援。二学期は体育祭、益子養護学校運動会への参加、学校祭などがありました。

部活動紹介では各部長が新入生を前に自分の部の紹介をするわけですが、部活動の活動状況が今一つの状態であるため、一人でも多くの新入生を自分たちの部に入部させようと熱弁をふるいました。益子養護学校との交流会は今年初めて行われた行事であり、対外的な行事の少ない生徒たちにはとても勉強になったことと思います。一学期の交流会は本校の農場で実施されました。内容は農場の見学、いちご狩りなどでした。二学期には益養校の運動会のお手伝いをするというかたちで実施されました。二つの交流会を実施するにあたって、障害者とうまく接することができるかどうか心配しましたが、明るく、人なつこい益養校生に少しおされながらも、立派な態度で接してくれました。野球の応援では例年どおり、即席の応援団ではありましたが会長の松田君を中心に応援委員会、ブラスバンドの生徒たちが一生懸命応援をしてくれました。二学期に入って間もなく体育祭があったわけですが、前年度の反省事項をふまえ種目の検討、メンバー表の作成、プログラム作り、前日の会場作りや用具の準備、当日の運営に後片付けと、役員全員積極的にとりくみました。十一月の学校祭は公開であったため、プログラムを手作りで作成するなど、準備にはかなり時間がかかりました。ヤングフェスティバルも例年よりもかなり多くの出場者により盛大に行われ、クラス展示にもユニークな発表が多く、各展示場ともにぎわっていました。

この学校祭で平成元年度の行事はほとんど終わったわけですが、当初の目標どおり、会長の松田君を中心に「生徒たちによる生徒会運営」という地盤がかなり固まってきたように思います。卒業していく役員は生徒会での活動経験をこれからの人生に役立て、新役員はさらに目標に向って真農の生徒会づくりに尽力してくれることを期待して筆を置きたいと思います。

農業クラブ一年の歩み

農業クラブ顧問　青山彦

昨年の四月、本校に赴任して早々、農業クラブ顧問を命ぜられ、浅学非才である上に物の在りかや役員生徒の顔も知らず、過去に数々の輝かしい業績を残してきた本校農業クラブを指導できるのか、私にとっては大変な不安の中でのスタートとなりました。

幸い前顧問の小林先生、前々顧問の高垣農場長をはじめ諸先生方の適切なアドバイスを得て、冷や汗の連続ではありましたが、一年間が無事過ぎようとしています。

農業クラブの競技には、意見発表、プロジェクト発表、農業鑑定競技、家畜審査競技、測量競技があり、それぞれに本校生徒が出場してきましたので以下にその報告をしたいと思います。

プロジェクト発表の県大会は、生活に関する部、及び関連産業に関する部の2部門が本校を会場に実施され、関連産業の部に出場した食品化学科2年瀬畑純子さん他七名による発表が見事に最優秀に輝き、関東大会の出場権を得ました。九月に山梨県で行われた関東大会では一位にはなれませんでしたが、練習～大会を通じ、非常にまとまったチームワークを見せてくれました。

意見発表では、校内発表で最優秀となった、農業科2年の伊藤徹也君（農業経営に関する部）、食品化学科2年菅谷百合子さん（農業関連産業の部）、生活科2年加藤恵美子さん（農家生活や農村に関する部）の三名が、六月に実施された那須拓陽高校での県大会に参加しましたが、それぞれ惜しくも最優秀賞を逃がし、関東大会には出場できませんでした。

九月に小山園芸高校で行われた測量競技・平板測量には園芸科3年の中里尚彦・大橋勝男・柳弘之君の三名がチームを組み出場しましたが、炎天下での猛練習の成果を発揮することができず、上位入賞を果せませんでした。

家畜審査競技・乳牛の部は六月に酪農試験場を会場に実施されましたが、本校から出場した生活科3年の高田奈々重さんが、見事百点満点の成績で全国大会への出場権を獲得しました。

「豊の国へ集いはばたけ農クの仲間」「限りなく未来に広がる農クの翼」の大会スローガンのもとに大分県で開催された第四十回全国大会には前記の高田さん、農業鑑定競技で校内一位となった農業科3年直井寿厳君、畜産科3年藤木繁君、食品化学科3年大谷綾子さん、生活科3年藤村由美子さんの五名が参加し、高田さんと大谷さんは見事入賞を果たしました。残念ながら入賞を逸した他の生徒諸君にとっても、資料収集や合宿しての学習会を通して得た有形無形の知識や体験は、将来において必ずや役立つものと確信しております。

最後に、紙面の都合で紹介はできませんでしたが、これ以外にもいろいろな場面で頑張ってくれた数多くの生徒諸君、不慣れな私をサポートしてくれた時野谷会長他の役員諸君に感謝して報告とします。

家庭クラブ活動を振り返って

家庭クラブ顧問　市岡淑子

今年度の家庭クラブは、会長の船橋由美子さんを中心に十名の役員、各クラスの代議員、そして全クラブ員が協力して活動してまいりました。

活動内容は、家庭クラブの「創造」「勤労」「愛情」「奉仕」の精神に基づいた、老人ホーム慰問、クリーン運動、保育実習、講習会、作品展示会などの地味な実践活動です。生徒は、その活動を通してよりよい一人の人間として成長し、また、併せて地域住民の一人として、地域の人々と共に生きる態度を身につけ、地域社会の発展に貢献することができるようになると思っています。

今年度は幸い「いきいき高校生活動スクールプラン推進事業」の実施校として県教委の選定をうけ「地域社会との交流を深めて」という内容で予算をいただくことができました。その予算を有効に使いながら、老人ホーム慰問、クリーン運動は月に一回ずつ、クラス単位で割り当て全クラブ員が活動に参加できました。本来、奉仕活動は自主的に参加するべきものですが、今年度のようにクラブ員全員を強制的に参加させるという教師主導型の体験学習でも、ボランティア精神、福祉の心を育む契機にはなったと考えております。今後、本格的な高齢化社会を迎え、ますます、思いやりの心、ボランティア精神が必要になってくると思われますので、今後もこのような体験学習を積み重ねていきたいと思っております。

次は老人ホーム訪問をした時の生徒の感想文です。

私は、老人ホームに行く前は「いやだな。せっかくの土曜日なのに」なんて思っていたわけですが、行ってみてそんな思いはどこかに飛んでいってしまいました。建物がきれいで設備も整っていました。窓ふきに入って行った時「どうもすみません」と言われ、寝ていた老人もだんだん起きてくれました。足が不自由で一人で起きられないおばあさんを起こしてあげたり、トイレまで車椅子を押してあげたりした時、「孫に車椅子を押してもらっているようだ」と言われ、とてもうれしかったです。帰り時間になっても、話し足らなかったので数人の友達と一時間残ることにしました。折り紙を教えてあげたり、いっぱい話し合いました。帰る時には「また来るからね」と言って握手して帰りました。おばあさんの手のぬくもりがまだ残っているようです。またおばあさんの笑顔を見るために訪問したいと思います。

この文を読むと、交流することで自然に思いやりの心が育つことが感じられ、顧問としてはうれしく思います。

このような生徒が次の世代の中心となり住みよい社会を作ってくれることを期待して筆を置きたいと思います。

修学旅行で一番心に残った事

二年四組　荻原ゆかり

私が、この修学旅行で一番心に残った場所は広島でした。修学旅行前にも、ぜひ見たいと思っていた場所でした。新幹線で広島に着いた時、たくさんのビルが建ち並んでいたのでびっくりしました。行く前までは、とってもさびしい所かと思っていたのです。しかし、バスの中から市街を見ていると何もなかったかのように活気づいていました。同席していた友達とも「なんだか信じられないね。」などと話していました。原爆ドームが見えて、確かに崩れているけれど、骨組みの部分はきちんと残っているし、半分以上はしっかりとしていました。写真の雰囲気と何か違うし、もっと大きいものだと思っていました。

バスから降りて、公園内を見てみると、けっこうたい木がたくさんあったのを見て、不思議に思いました。木などは放射能などを浴びても大丈夫だったのでしょうか。そう思うと人間はどんなに優れていても、どんなに強くても自然にはかなわないし、人間が作り出したものの方が人間より強いということはあってはならないと思います。

今、まだ地球のどこかで戦争が起こっていることさえ信じられないし、この日本でも戦争をしたということさえ信じられない。今は平和な世の中です。でも、認識しなければならない事なのです。戦争がどういうものか、自分からわかろうとしなければ、この平和も長く続くかどうかわかりません。資料館で見た、いろいろな写真は、戦争のむごたらしさを表わしていました。ああいう風になりたくない。ああいう人達を今後だしてはいけない。私は広島を後にするとき、心の中にしっかり刻みつけることができました。

就農者も高学歴化時代

進路指導部長　西岡隆義

今年は就職希望者にとって近年にない好景気に支えられ大変恵まれた年であったと言えますが、大学・短大への進学希望者にはかつてない厳しい年になりそうです。

産業が高度化し、個人所得が伸びて高学歴化が進むなかで、就農希望者にも進学希望者が確実に多くなってきております。

農業が最早国際的視野で考えなければならない時代に入っていることを思うとき当然の成り行きと言えるでしょう。

ここで本校生の過去の進路状況を五年間隔で自営（在家も含む）進学・就職の割合をみてみますと、自営学科では自営者数の急減に反比例して進学・就職数の増加が目立ちます。ただし今年度は、大手企業からの求人数が多かった為か進学から就職へ進路変更した生徒が多く出ています。

食品化学科と生活科の進路状況は非常によく似た経過をたどっていますが、調理・栄養・美容・保母などの科の特性を生かした進学の他、最近ではビジネス系への進学も増えてきています。

自営学科全体（表1）

	自営・在家	進学	就職
44年度	88.0％	2.1％	9.9％
49 〃	21,1	21.9	57.0
54 〃	22.4	22.4	55.2
59 〃	4.8	32.1	63.1
平成元年度	0	18.5	81.5

生活科（表3）

	自営・在家	進学	就職
44年度	43.5％	0	56.5
49 〃	7.5	5.0	87.5
54 〃	2.4	12.2	85.4
59 〃	1.4	9.9	88.7
平成元年度	0	10.7	89.3

食品化学科（表2）

	自営・在家	進学	就職
44年度	2.4％	2.4	95.2
49 〃	4.2	31.2	64.6
54 〃	5.0	10.8	83.8
59 〃	0	6.1	93.9
平成元年度	0	13.5	86.5

◆農業クラブ全国大会◆

農業鑑定競技会に出場して

食品化学科3年　大谷　綾子

去る、十一月十四日から十六日まで、農業クラブの全国大会が大分県で行われました。

私達は、前日に大分県に入りました。新幹線の中で、他校の友人がノートを開いて勉強しているのを見ると、私もやらなくてはと、気持ちばかりあせっていました。私達は前日まで学校祭だったので、その前の一週間くらいは準備のため走り回っていました。そのため、最後の追い込みという時に、あまり勉強ができず、仕事が終わった後の短い時間に、スライドを見たり、先生に聞きに行ったりしました。そんな事があったので気持ちがあせる一方だったのだと思います。

十四日は、翌日の競技の説明会が行われました。説明会会場に着くと、もうたくさんの人が来ていて、改めて全国大会に来ているんだ、と実感しました。

私は鑑定競技の食品製造コースに出場したのですが、県内で同じコースの人が三人しかいなかったので、競争意識が高まり、この日の夜は十二時過ぎ頃まで勉強しました。

大会当日、会場へ向かうバスの中が競技前の最後の勉強となるので、覚えられるだけ覚えておこうと必至でノートをめくっていましたが、あっという間に会場に着いてしまったので、後は今まで勉強したことを一つ一つ思い返していました。

刻一刻と、私の順番が近づいてきました。会場内は静まりかえって、合図の音だけが鳴り響いていました。思っていたよりも落ち着いて問題を解くことができましたが、一問に与えられた二十秒という時間がとても短く感じられました。待っている時はとても長く感じた時間も、四十問の問題を全部解き終わった時には以外と短かかったのだと思いました。私の分からなかった問題が七問くらいあったので入賞はとても無理だと思いました。

十六日の閉会式の朝、会場で配られた速報を見てみると私の名前が載っていたのでびっくりしました。結果を知って、初めてほっとした気持ちになれました。

一年も前から、この全国大会へ向けて勉強を始め、又、合宿も行い、その成果が表われたのだと思います。この全国大会では、いろいろな事を知り、友人も増え、私にとって忘れられない良い思い出となりました。

家畜審査競技会に出場して

生活科3年　高田　奈々重

去る十一月十四日から十六日までの三日間、私は栃木県代表として、大分県で開催された家畜審査競技会の全国大会に出場しました。競技会の日はとても寒く、緊張もあって身震いが止まりませんでした。しかし本番に入って四頭の牛を見たとたん私の肌寒さは緊張と共に消えてなくなりました。とにかく冷静に四頭の牛を見極めて順位を付けなくてはと思い、一頭ずつじっくり見て、それから各部位の良し悪しを決めました。最初どの牛も同じに見えましたが次第に目が慣れてくるとわずかながら違いがわかるようになり、順位を付けるのが多少楽になりました。

家畜審査に出場した女子の人数というのは四十九人中六人と少人数でしたのですぐに他の五人と友達になることができました。全国大会を通して他県の友達と交流できたり、クラブ員のコミュニケーションをもつことができ良い思い出になりました。

離れた土地で約一週間すごすということは、初めての経験でしたので、旅館などは落ち着いて寝ることができず、寝不足状態が続きましたし、常に家族のことが気になりました。

しかし大会当日、九州の海、山林など多くの自然に囲まれた中での競技場ではリラックスすることができ、実力が十分発揮することができたと思います。

大会が終わり待ち遠しかった家に無事帰ることもでき、何よりも、一生懸命頑張った結果、入賞することができ、それが私にとっての最高の土産になりました。県大会、全国大会と数々の牛を見てきた私は、将来畜産を営む上で大切なことを学んだ様な気がします。

私に細かな指導を下さった先生方、農家の方に感謝いたします。ありがとうございました。

同窓会総会・祝賀会盛大に開催さる

平成元年度同窓会総会が、四月二十八日（金）本校会議室で開催されました。

会長、学校長あいさつ、来賓祝辞のあと議事に入り、昭和六十三年度会務・決算報告及び平成元年度事業計画・予算、昭和六十三年度基本金運営費決算及び平成元年度同予算、さらに昭和六十三年度青年部会務・決算報告及び平成元年度同部事業計画・予算などが熱心に審議されました。おもな決議事項は別表のとおりです。

また、総会終了後、祝賀会並びに懇親会が市内結婚式場で五十余名の参加により盛大に行われました。受賞された諸氏は次のとおりです。

衆議院議員在職二十五年表彰　広瀬秀吉氏（昭十年卒）

真岡市長当選　菊地恒三郎氏（昭十六年卒）、黄綬褒章受賞　斉藤喜久雄氏（昭二十一年卒）、優良農家　高崎弘幸氏（昭四十七年卒）　同　大田和正一氏（昭四十一年卒）　同　大塚実氏（昭四十八年卒）　同　稲見孝一氏（昭四十三年卒）、同　野沢進氏（昭四十九年卒）。

平成元年度会務並びに事業計画

項目	年月日	場所	摘要
入学式	元 4.7	本校	会長出席
転任職員餞別金贈呈	元 4.8	〃	〃
会計監査	元 4.28	〃	昭和63年度会計監査
役員会	元 4.28	〃	総会について
総会	元 4.28	〃	会務事業報告、決算、予算案他
祝賀会	元 4.28	市内	表彰者、優良農家他
役員会	元10中	本校	会報発行、優良農家推薦他
会報編集委員会	2. 1.中	〃	会報編集
会報発行	2. 2.下	〃	会報発行
常任理事会	2. 2.下	〃	優良農家推薦
同窓会入会式	2. 2.下	〃	役員出席
卒業式	2. 3.上	〃	〃
会計監査	2. 3.下	〃	平成元年度会計監査
役員会	2. 3.下	〃	平成2年度総会について

平成元年度予算

1 収入の部

科目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
1 会費	426.000	418,000	8,000	昭和63年度卒業生
2 繰入金	0	0	0	
3 繰越金	384,385	342,933	41,452	前年度繰越金
4 雑収入	1,000	1,000	0	預金利子他
5 寄付金	1	1	0	
計	811,386	761,934	49,452	

2 支出の部

科目		予算額	前年度予算額	増減	摘要
1 運営費		220,000	175,000	45,000	
内訳	①総会費	50,000	20,000	30,000	資料作成、総会補助
	②会議費	50,000	50,000	0	昼食代等
	③事務費	10,000	5,000	5,000	事務用品代
	④旅費	80,000	80,000	0	
	⑤通信費	30,000	20,000	10,000	切手代
2 渉外費		200,000	200,000	0	
内訳	①慶弔費	200,000	200,000	0	香料代
3 事業費		200,000	170,000	30,000	
内訳	①入会式費	40,000	40,000	0	印鑑代
	②名簿発行	10,000	10,000	0	印刷代
	③会報発行	150,000	120,000	30,000	〃
4 雑費		41,386	66,934	△25,548	
5 予備費		150,000	150,000	0	
計		811,386	761,934	49,452	

同窓会役員

◎本会役員

会長　菊地恒三郎
副会長　勝田　正　金敷　芳雄　小倉　信義
常任理事　青柳　宗内　菅谷　忠太　大滝　弘明　井野　博　古橋　修一　青木　良雄　藤田　芳
監事　田上　進一　野沢　弘　加藤　博

◎支部長

真岡　山田孝一郎
山前　日下田圭治
大内　大塚　克巳
中村　川又　侃
久下田　小島　豊
物部　野沢　弘
長沼　海野　保
益子　小出　貫凡
田野　広田源太郎
七井　佐藤　忠雄
水橋　小林　武一
祖母井　山本　豊
南高　黒崎　亨
茂木　荒井　睦夫
小貝　関沢　仙
市羽　小林　泉吉
宇都宮　早乙女俊夫
清原　半田　光有
瑞穂野　早乙女俊夫
本郷　小口　栄敏
上三川　なし
河間　渡辺　忠雄
茨中　杉山　恵一
五所　杉山　和男
小栗　広沢　茂
岩瀬　吉田　誠義

◎青年部

部長　大滝　和弘
副部長　石塚　孝男　仁平　信宏　高平　登順
常任理事　鷲谷　美一　河原　正美　塚田　吉久　松本　昌万　佐藤　正美　加藤　太
監事　木村　弘美　川上　洋一　小玉　貴浩

編集後記

今回も皆様方のご協力を賜わり、会報十四号を出すことが出来ました。すでに増面をして、内容も豊かになり有難く思っております。しかしやゝ形が決まってしまった観があります。小さく数多くを目的にして、会員の皆様から広範囲に亘り、楽しく面白くて懐かしく読める原稿を集めたいと意図する次第です。

会員の皆様のご協力を心よりお願い申し上げます。